

オーストリア Kamptal ジオパークを訪ねて

大 矢 暁¹⁾

2006年6月の12日から15日までオーストリア・ウィーンでEuropean Association of Geoscientists and Engineers (EAGE)の年次総会が開かれた。この学会はいうならヨーロッパ物理探査学会という性格のもので、石油・天然ガスの探査・開発に関わる研究発表があり、また大きなスペースで展示会が持たれる。この際に、以下のような経緯でオーストリアのKamptal Geoparkを訪問する機会を得た。

中国で5月に開かれた国際Geopark開発シンポジウムで知り合った、世界Geopark推進のための組織であるGEOSEE (Geoparks Approach: Science, Heritage, Communication, Socio-Economy and Education)の会長Werner Janoschekさんが、EAGEに参加され国連国際惑星地球年(IYPE)のブースを持たれ、IYPEのプロモーションを目的に講演もされた。Janoschekさんのご好意で、オーストリア地質調査所を訪問することが出来、また、ウィーンから日帰りできるオーストリアのユネスコ認定ジオパークを訪ねてみたいという私の希望を、現地の博物館長に伝えていただき、思いがけず、Kamptalジオパークを見てくることが出来た。

ウィーンから2時間弱、列車でEggenburgに着く。Eggenburg駅には博物館の副館長Fritz Steiningerさんが迎えに来てくれた。

6月15日はオーストリアの休日である。この休日を利用して地元地質の好きな人たちが集まってKamptalジオパークの巡検をしようということになっていて、その一員に加えていただくことになった。巡検は午後1時出発。それまでに、Eggenburgの町と博物館を案内していただいた。

EggenburgはKamptalジオパークの玄関といえる町。町全体が博物館の感じがする。城塞都市というにはあまりに小さな町であるが、中世の城郭を今に残

しており、1880年までは城郭の中だけに町の人が生活していたのだそう。その後幾つかの建物や住宅が城郭外にもできるようになった。博物館もその1つである。城郭で囲まれた中の家は皆古い。口絵3ページ左上の写真はこの町の鳥瞰をパンフレットから引用したもので、町の中央に広場がある。城郭も殆ど全体が残っており、教会もあり独立したコミュニティがあることがよくわかる。歴史的な町の景観を損ねるような近代的なコンクリート建物などは全く無い。

このような町全体が今日まで保存され維持されてきたことに驚くばかりであるが、実はこのようなヨーロッパ人気質がKamptalジオパークの原点にあるように思える。地元ではKamptalジオパークという表現は無く、Kamptalカルチャーパークと呼んでいる。地質的にも面白い場所であるが民俗学的な遺跡も多く、中世以後の彫刻が至る所にある。この彫像に使われてきた石灰岩がこの地域の特産だという。

ネオルネッサンス風のKrahuletz博物館は1902年に建築された。Eggenburgの測量士であり後に地質学の教授になったJohann Krahuletzさんが収集した地質学的な、また民俗学的な収集品を展示する目的で作られたものである。Kamptalジオパークの玄関といわれている博物館を駆け足で案内していただく。小さな博物館であるが、この地域の地質構造を示した模型があり、陥没構造やブロック運動の結果、第三紀、第四紀に浅い海が広がったこと、そこから産出した鱈の化石や貝化石、植物化石などが整然と展示されている。

Eggenburgは城壁が作られた12世紀以後の町の歴史を色濃く残している。中世文化村といったところ。

博物館でいただいた資料の中に、「町で見られる、生きている化石樹」とでも言う資料があった。31種類

1) 故人(NPO法人地質情報整備・活用機構元会長)

キーワード: ジオパーク, オーストリア, Kamptal Geopark

の生きている化石樹を簡単に説明して、町のどこに行けばそれを見られるか、という地図付のパンフレットである。中新世からの生きた化石と説明があるメタセコイア、2億年前中生代からの生きた化石樹銀杏の説明もある。31それぞれの種に番号が振られ、その番号が Eggenburg 町の地図に示されていて、古くから生きた化石を見て歩く散策が出来るようなパンフレットである。このパンフレットには地質年代表も示されている。植物を見ながら、地質年代や何時の時代にこの地域に海が侵入したかなどを知ることのできる簡単な地史の説明も付けられていた。

Kamptal ジオパークはオーストリア東部の地質図に示したようにウィーンの北西約80kmのところ、東西約20km、南北約30kmほどの区域である。ダニューブ川の左岸北側に広がる中生層の丘陵地の一部。地層はパリスカン変動で褶曲し変成している。規模の大きなブロック運動の大断層も見られる。変動の結果、第三紀中新世には海が侵入し、鱔の化石や貝や植物化石も多く見られる。Eggenburgはこの範囲の東北部に位置する。

さて、このような Eggenburg の博物館の見学を30分ほどで終え昼食をご馳走になり、1時に博物館の前に集合、総勢約20名の巡検のスタートである。この巡検にはウィーンにある地質調査所の若い地質研究者が参加してくれた。この地域の地質を研究し、5万分の1の地質図もこの人が作ったものらしい。巡検に出発する前、今日歩くコース、どんな地質があるのかなどの簡単な説明を、地質図を示しながらしてくれる。

オーストリアはドイツ語圏。説明はすべてドイツ語であった。Fritz Steininger さんが英語で要約的に説明をしてくれたが、細かいところまでは理解できないのが残念であった。

私はオーストリアの地質調査所で巡検範囲を含む20万分の1の地質図を入手していた。その地図で見ると、Kamptal ジオパークの範囲は主として中生層が変質した変成岩が分布し、その上を中新世以後の若い地層が覆っている。変成岩は地形的な上位に Granulite (グラニュライト相)、下位に Amphibolite (角閃岩相) が分布する。地質の説明はこれらの地層についてであり、グラニュライトは石英・長石・柘榴石を含む細粒緻密な岩石で変成度は高いのに変成度の低い角閃岩の上に乗っている構造になっていること、その中に蛇紋岩などもみこまれているのが見られ

るなどの説明であった。

地質の露頭の説明のほか、ルートには中世の砦の遺跡もあり、Kamp川の水流を利用した水車小屋の遺跡なども見られた。また、Kamp川に沿っての遊歩道は整備があまりよくなかったが峡谷状になっているところもあり、緑も豊かで森林浴も楽しめた。

しかし、中国の雲山地質公園のような奇岩絶壁が連続しているわけではない。日本でもどこにでもあのような渓谷沿いの散策道である。

2006年5月の第1回国際ジオパーク開発シンポジウムの際に中国の雲山地質公園と嵩山地質公園を見、そして今回ヨーロッパの代表的と言えそうなジオパークを見てきた。私の得た印象は中国の場合には中央政府、地方政府とも強力に地質公園プロジェクトをサポートしている。雲台山の場合、地元焦作市が、石炭産業の斜陽化した中で観光を市の重要な産業として位置づけ、大きな予算を準備して地質公園作りを進め、成果を上げている。政府主導型のプロジェクトである。一方、オーストリアの場合には、遊歩道の整備なども十分でなく、また説明するボードなども殆ど無い。しかし、気のきいたパンフレットや充実した博物館がある。文化的な遺産を保存し、地質、植物、考古学的遺産、民俗学的遺産、などを総合してカルチャーパークとしてその維持発展に努力する哲学がある。

中国の場合には、入り口にゲートを設け、入場料をとる。中国の国立研究所若手職員の月給の3%程度のかかなり高い入場料(120元)である。その代わり公園の中のバス、電気自動車、リフトなどは無料で利用が出来る。公園内の遊歩道などはまことによく清掃されている。雇用対策であろうか多くの公園管理者がごみの清掃に当たっている。遊歩道はどこも禁煙で環境に配慮していることを売り物にしている感じである。

オーストリアの場合にはゲートもない、入場料も取らない。しかし、現地に行けば、例えば博物館に行けば、いろいろな資料や情報を得ることが出来る。それをもとに、自分だけでも楽しく散策が出来る。巡検や化石採取の会、生きている化石植物を見て回る会もある。そこには地質だけに拘らない、カルチャー・パークというユニークなコンセプトがある。

ヨーロッパジオパーク会議が持たれているが、このような自然に親しむパーク作りのコンセプトや哲学が

交換され刺激しあっているのではないかと思える。

一口に言えば、発展途上国型のジオパーク、地域経済活動の振興に貢献するジオパーク作りを、中国雲山地質公園では感じる。オーストリアでは民間の博物館に本当に地質の好きな人がおり、その人が博物館や展示品、パンフレットなどをツールに使うことでカルチャーパークをプロモートする中心になっている。成熟社会型のジオパークと言えそうに思えた。歴史のある古い町を保存しているという社会的コンセンサスがある。私は、ヨーロッパの場合は成熟度の高い社会が、そして独自性を尊ぶ哲学的背景があるように感じた。

十分な数のジオパークを見たわけでもないし、ジオパークに関する文献や資料をよく調べたわけでもないので、直感的な感想に過ぎないが、どうもジオパーク作りには、社会の成熟度、地質や歴史遺産に対する伝統的な哲学が反映しているように感じた。

そのように考えると、日本ではジオパークをこれから育てて行く場合に、中国型を考えるのか、ヨーロッパ型を考えるのか？ 私の意見は、すでに日本の地質の面白いところの多くは国立公園や県立公園に指定されているし、天然記念物にも指定されている。それをベースに観光産業も結構盛んである。これらの自

然公園を訪れる人の数は年間8億人を超える。それなのに、地質に興味を持ってもらえるようなパンフレットもマップも無い。これまで力を入れてこなかったのは地質遺産としての重要性の認識と、それを社会に啓蒙し遺産の価値を地元の人たち、観光客、とくに将来をになう子供たちに理解してもらおう努力が少なかったことが問題なのではないかと思える。日本では日本型ジオパークを作るのが良い。機械的にユネスコの基準に合わせる必要も無い。重要なことは地域にしっかりした地質屋が活躍できる条件を作ることではないかと思える。

日本でもSteiningerさんのような地質の好きな人が定年後故郷に戻り、地域のジオパーク活動に活躍できるようにしてほしいものである。

注：本稿は、NPO法人地質情報整備・活用機構発行のGUPI News Letter No. 36に故大矢暁氏が発表された文章を、同法人の許可を得て転載させていただいた。転載にあたって渡辺真人(地質情報研究部門)が一部加除修正した。

OHYA Satoru (2007) : Report on a visit to Kamptal Geopark, Australia.

<受付：2007年4月2日>